OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	補注
Author(s)	
Citation	詞林. 1991, 10, p. 84-89
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67310
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

補注

「大井河行幸和歌」には忠岑と貫之の序文並びに、是則作以外の和歌・漢詩が残っているので、ここに纏めて記しておく。

忠岑の序文（『忠岑集』Ⅳより）

えんぎ七ねん、ていじのみかどの御とき、みゆきせさせたまひしわかのそ

なゝつのとし、こゝのつのあきは、よろこびをのぶる十日山しろのくに、かどのゝこほり、おゝゐのかは、むめつよりゆたかにひらきて、よをきこしめしのりのみかど、ひじりのきみあきのゆきをきこしめさんと、みふねどもをならぶること、くもをあめるいかだのごとし、さすべきさをのしげること、なみをかくめるかきにゝたり、かつらをれるひとをば、なべておいたるをもわかきをもとめしめたまひ、はなの心をしれるともがらを、たかきもみじかきもさぶらひしめらひて、かめのをやまに、ゝしきのごふかづけりときく、これをごらんぜんとおほせたまひき、よきたきのみづに、くれなゐのぬのさらすなり、それをみしめんとのたまひて、さしのぼるさをのしづく、しぐれにしては、ぬるゝそでかずしらぬもみぢにそめ、こぎゆくふねのかぜにふきては、のれる人いくえのくもがさはぎて、みづのそらすみて、月のかよはんに、なみのせきながるべし、あまつそらよりもきよくはれて、ほしのひかり、くものちりもゐざりけん、かゝることを、かぜのつてにてうけたまはる、いやしき人はありてたまひしを、まどはらふたとへは、なつのせみのむなしくして、あきのはやしにとまれる、むかしのおほせのむねをうけたまはりて、ひるは日ぐらし、むしをもとめ、よるはよもすがら、そらのこゑをとゝのへ、しづめるときには、山のはに月まつむしうかゞひては、きんのこゑにあやまたせ、あるときには、のべのすゞむしをきゝては、たきのみづのおとにあらがはれ、ときはきりのまがひ、つゆにぬれしくるゝひは、いづれのとしのあきかしらざらん、このことを、ゆめのうちに、くものたよりやまづに、あたらふそもしづかならんをりに、こゑありてきこゆるたいは、こゝのつのそのこゝろおなじからず、みなをの〳〵かずかぞへて、あはれて、つるすにあそむでは、かたのかもめなれたり、すのまつはおいて、きしにのこれる、きゞなるはな、わかしさる山のたえまになきて、はかなきこゑたかし、くれなゐのはゝはやしのほとりにおつれども、そのこゑはみそかなり、あきのみづにうかびては、あきの山のきもかげをやすむ、たびのかりつもる、いかにそのはねのほころび、いまははづるゝころに、このひとに、そのかずにあらずしてのがるゝものならば、ひかりをとくちりのかすみに、いとはるゝにゝたらん

貫之の序文（『古今著聞集』巻十四・「亭子院御時大堰川行幸に紀貫之和歌の仮名序を書く事」より）

亭子院御時、昌泰元年九月十一日、大井川に行幸ありて、紀貫之和歌の仮名序かけり。

あはれわが君の御代、なが月のこゝぬかと昨日いひて、のこれる菊見たまはん、またくれぬべきあきをおしみたまはんとて、月のかつらのこなた、春の梅津より御舟よそひて、わたしもりをめして、夕月夜小倉の山のほとり、ゆく水の大井の河辺に御ゆきし給へば、久かたの空には、たなびける雲もなく、みゆきをさぶらひ、ながるゝ水ぞ、そこにごれる塵なくて、おほむ心にぞかなへる。いま御こととのりしておほせたまふことは、秋の水にうがびては、ながるゝ木葉とあやまたれ、秋の山をみれば、をりひまなき錦とおもほえ、もみぢの葉のあらしにちりて、もらぬ雨ときこえ、菊の花の岸にのこれるを、空なる星とおどろき、霜の鶴河辺にたちて雲のおるかとうたがはれ、夕の猿山のかひになきて、人のなみだをおとし、たびの雁雲ぢにまどひて玉札と見え、あそぶかもめ水にすみて人になれたり。入江の松いく世へぬらん、といふ事をぞよませたまふ。我らみじかき心の、このもかのもとまどひ、つたなきことの葉、吹風の空にみだれつゝ、草のはの露ともに涙おち、岩波とゝもによろこぼしき心ぞたちかへる。このことの葉、世のすゑまでのこり、今をむかしにくらべて、後のけふをきかん人、あまのたくなわくり返し、しのぶの草のしのばざらめや。

太政大臣　貞信公

在原業平九　小倉山紅葉の色も心あらばいま一たびの御幸またなん

躬恒

入古今第十九　雑躬恒歌　わびしらにましらなゝきそ足引の山のかひあるけふにやはあらぬ

この行幸の年紀并歌仙等の事、かた〴〵おぼつかなし。こまかに尋てしるべし。

（岩波古典文学大系）

大井川行幸において作られた漢詩・和歌

※漢詩は、とくに断らない限り後藤論文（13番【付】参照）で紹介された、『書苑』十巻九号所収の一葉による。なお、この一葉は春名好重編著『古筆大辞典』の「詩懐紙（藤原行成）」の項に写真が掲げられている。漢詩は「泛秋水」「望秋山」「紅葉落」「菊花残」の順で書写されている。また、『躬恒集』、『忠岑集』はともに「Ⅳ」の本文を使用し、その他の本にも載る場合は番号のみを挙げる）

13　望秋山

千重澗戸懸紅葉　百丈山腰帯白雲

欲趁赤松巌下駐　還愁秋桂動移文

『躬恒集』Ⅰ・二〇、Ⅲ・一九八、Ⅳ・一三、Ⅴ・五四

あきやまにのぞむと

けふなればをぐらのやまのもみぢばゝよるさへてりてみえわたるらむ

『忠岑集』Ⅱ・八六、Ⅳ・九四

あき山をのぞむ

あきやまのもみぢみしまにひぐれてはたつたひめにやゝどはかるらむ

『頼基集』二二

あきのやまに

しらつゆはわきておかじをあきやまになどかもみぢのうらになるらむ

14　泛秋水

昨朝北闕見神仙〈重陽侍宴観秦霓裳羽衣曲〉　今日西河賞晩煙

不覚応為星漢客　舟行暗渡水中天

『躬恒集』Ⅲ・一九六、Ⅳ・一一、Ⅴ・五二

亭子のみかどのおほゐにおはしませるときにこゝのつのだいのうた、あきみづにうかべり

このかはにこのはとうきてさしかへりみはけふよりぞみなれそめぬる

『忠岑集』Ⅲ・一〇八、Ⅳ・九三

あきの月にうかぶ

あきふかくうかべるみづのふかければ山をよきてやそこをみるらむ

『頼基集』二一

大井川の行幸に、さま〴〵のだいどもをよませたまふに、みづにうかぶといふだいを

いろ〳〵にかけるころもをあきのみづもみぢながすとひとやみるらむ

『新拾遺集』巻十八・雑上・一六七〇・紀貫之

延喜七年大ゐ川に行幸の時、序たてまつりて、泛秋水といへる事をよめる

波の上を漕ぎつつゆけば山近み嵐にちれるこのはとやみん

17　紅葉落

露染霜侵又得風　可憐紅葉満晴空

飄零岸上都無限　緑水流将晩浪紅

『躬恒集』Ⅰ・二二、Ⅲ・二〇〇、Ⅳ・一五

もみぢおつ

にはのおものからくれなゐになるまでにあきにあひかねおつるもみぢか

『躬恒集』Ⅰ・二三、Ⅱ・一三七、Ⅲ・一二一、Ⅳ・四七〇、Ⅴ・五七、九六

風にちるあきのもみぢはのちついにたきのみづこそおとしはてけれ

『頼基集』二三

もみぢゝる

もみぢはのながれうづまくふちをこそくれ行秋のかたみとはみめ

『忠岑集』Ⅱ・八八、Ⅲ・一〇七、Ⅳ・九二

もみぢおつ

いろ〳〵のこのはおちつむ山ざとはにしきにとめるなきなたつらん

19 菊花残

愛菊逆流日漸斜　重陽明日折残花

両三黄朶知何処　応是陶潜沢畔家

『躬恒集』Ⅰ・三九、Ⅲ・二〇二、Ⅳ・一六、Ⅴ・五八

きゞくのこれり

きくの花今日をまつとてきのふおきしつゆさへきえすえのさかりなり

『躬恒集』Ⅰ・四〇、Ⅲ・一七、Ⅳ・一三四、Ⅴ・五九

きみがためこゝろもしるくはつしものおきてのこせるきくにさりける

『頼基集』二五

きくのはな

みゆきをばけふとやかねてきくのはなきのふのいろのあせでのこれる

『忠岑集』Ⅱ・九〇、Ⅲ・一〇六、Ⅳ・九一

きくのこれり

しもわけてさくべきはなもなきものをいろをのこして人をたのむる

20

『躬恒集』Ⅰ・四二、Ⅱ・二八〇、Ⅲ・二〇四、Ⅳ・二〇、Ⅴ・六三

たびのかりゆく

ふるさとをおもひやりつゝゆくかりのたびのこゝろはそらにぞあるらむ

『躬恒集』Ⅳ・二一、Ⅴ・六二

としごとにともひきつらねくるかりをいくたびきぬととふひとぞなし

『躬恒集』Ⅰ・四三、Ⅱ・一三二、Ⅲ・一一六、Ⅳ・四六五、Ⅴ・六四

あきごとにたびゆくかりはしらくものみちのなかにや夜をばつくさむ

『頼基集』二四

たびのかり

すむさとはさだめなければたびのかりそらにぞうきてなきわたるなる

『忠岑集』Ⅱ・九一、Ⅲ・一一〇、Ⅳ・九五

たびのかりゆく

むかしよりはるたちかへりあきはきぬいづらをかりのたかひ

といふらん

42 江松老

『拾遺集』巻八・雑上・四五五・紀貫之

おなじ御時、大井に行幸ありて、人人にうたよませさせ給ひけるに

大井河かはべの松に事とはむかかるみゆきやありし昔も

『続古今集』巻十八・雑歌中・一六六一・藤原伊衡

同じ院にしかはにおはしましたりける日、江松老といふことを題にてよみ侍りける

江にふかくとしはへにける松なれどかかるみゆきは今日やみるらん

『躬恒集』Ⅰ・四八、Ⅱ・二七六、Ⅲ・二〇九、Ⅳ・二六・四一三、Ⅴ・六九

えのまつおひたり

ふかみどりいりえのまつもとしふればかげさへともにおいにけるかな（あるほニ「ぬ」「らなりとあり」）

『躬恒集』Ⅰ・四九、Ⅲ・二一〇、Ⅳ・二七、Ⅴ・七〇

おいにけるまつぞしるらむあゆかはのみゆきもかくはあらざるけらし（り）

『頼基集』二八

えのまつおいたり

えにふかくとしふる松はみなそこのかげにさへこそいろはみえけれ

『忠岑集』Ⅱ・一一八、Ⅲ・一〇五、Ⅳ・九〇

えのまつおいたり

としふかくねざしいりえのまつなればおいのつもりはなみやしるらん

43 鶴立洲

『古今集』巻十七・雑歌上・九一九・紀貫之

法皇にし河におはしましたりける日、つるすにたてりといふことを題にしてよませたまひける

あしたづのたてる河辺を吹く風によせてかへらぬ浪かとぞみる

『躬恒集』Ⅰ・四一、Ⅲ・二〇三、Ⅳ・一八、Ⅴ・六〇

つるすにたてり

つるのゐるかたにざりけるしろたへのあまのぬれぎぬほすとみつるは

『躬恒集』Ⅳ・一九、Ⅴ・六一

うらわきて風やふくらむおきつなみおなじところをたちかへりつゝ

『頼基集』二六

つるかはにたてるを

みづちかみすまひすればやまなづるのながれてちとせありといはるる

『忠岑集』Ⅱ・一二二、Ⅲ・一〇三、Ⅳ・八八

つるすにたてり
まなづるのたちゐななせるかたのすにちとせのあとをのこさざらめや

44 馴鴎人

『躬恒集』Ⅰ・四六、Ⅲ・二〇七、Ⅳ・二二、Ⅴ・六七

かもめなれたり
なれくらしおきのかもめはつげなくにのちのこゝろをいかでしりけむ

『躬恒集』Ⅰ・四九、Ⅲ・二〇八、Ⅳ・二三・四一一、Ⅴ・六八

すにおればいかのうらにまがふとりてにとるばかりなれにける哉

『頼基集』二七

かもめなれたり
しらなみやみによせかゝるともおもはでたちもさはがずなるるとりかな

『忠岑集』Ⅱ・一二四、Ⅲ・一〇四、Ⅳ・八九

かもめなれたり
しらなみのこせどもたえずむれゐつつひとになつかんみなれたるとり

45 猿鳴峡

『新撰朗詠集』下・雑・猿・四二三・三善清行

峡裏猿鳴悲又清　況聞薄暮第三声　巍峨　巻公

『古今集』巻十五・雑体・俳諧歌・一〇六七・凡河内躬恒

法皇にし河におはしましたりける日、さる山のかひにさけぶといふことを題にてよませたまうける
わびしらにましらなきそあしひきの山のかひあるけふにやあらぬ

『躬恒集』Ⅰ・四五、Ⅲ・二〇六、Ⅳ・二五、四一二、Ⅴ・六六

こゝろあらばみたびてふたびなくこゑをいとゞわびたる人にきかすな

その他、後藤論文では次に挙げた『予楽院臨書手鑑』四六の「（伝藤原行成筆）藤原菅根詩写」の詩も「眺望九詠」の中の詩ではないが、大井川行幸時の作であると指摘されている。

輪十日未金盈、夜還勝十五。相助照三千世界、更添明。
九詠外有勅、更献翫月詩一首。
別当式部大輔臣藤原朝臣菅根上
秋月為君明　相携共乗晴華山面白　影落水心清　従事高低在
遂人遠近行　亘娥来莫ん挑　太上脱塵纓
元禄七年四月二日模写之